

縄文ランドスケープ

小林 達 雄*

ただいまご紹介にあずかりました小林です。今富樫さんのお話にもありましたように、私の考古学あるいは縄文文化の研究におきましては、この秋田県というのは大変私にとっても大事なところで、つまりいろいろな遺跡あるいは遺物のことで教わって初めて今日あると言っても過言ではないかと思います。そういうその縁の深いところで、皆さんと今日はちょっと耳慣れないタイトルかもしれませんが、でも縄文ランドスケープということで少し考えてみたいと思います。

ところで、人類は450万年前から遊動的な生活をしておりました。生活のパターンと言いましょ、暮らしぶりというのは、猿やチンパンジーと同じように朝目が覚めると、まず食べる物を探します。そして目の中に入る食べ物を手に取ると、そのまま口に持っていくというこれが長い間の実人類の生活でした。この点がお猿やチンパンジーと殆ど同じなのです。

その後、いろいろな条件が整いまして、食べ物があってもすぐにそれを口に運ばない、つまり食べ物は用意された籠の中に入れ、そしてそれを村に持ち帰るというような生活になるのです。これが実はお猿やチンパンジー的生活様式から、手に入れた食べ物は用意した籠に入れて村に持ち帰るというそういう生活に移り変わった時代なのです。これを私たちは定住と呼びます。一カ所の場所に腰を落着けて何年も、あるいは何十年も生活するようになったのです。これがチンパンジーと全く違うところでございます。

実は今日お話ししようとする縄文時代というのは、そういった半永久的な村を営むということが、この縄文時代の特徴でございます。それまでというのはせいぜい数日間そこに逗留すれば間もなく動かなければいけない、そういう生活だったわけです。実は猿やチンパンジーもあまり動かなくてもすむのなら動かない方がいいわけです。その方が楽なわけですね。暇ができれば遊んだり、それから子供の世話をしたり、あるいは昼寝をしたりしていればいいわけですが、なぜああいうふうに移動したりするかというと、それは食べ物の種類が限られていたからです。食べ物の種類がかぎられていますから、身の回りにあるものを食べ尽くすと、一つのグループにとってはそれ以上の食べ物が無くなって、そして次の新しい場所へ動かなければいけなかった訳です。そうやって夜になるとその夜の寝る場所を作り、そして朝起きるとまた動き始めるということだったわけです。

縄文時代に入るとそういう長い歴史、体験を踏まえて一つまた一ついろいろな種類の中から食べられる物を探し発見していきます。やがてそれまでには無かったような多種多様な物を食べるようになってきたわけです。それだけの成果を獲得したわけです。これは人類の歴史における大変な成果です。特に縄文時代の特徴はいろいろな物をわけへだてなく食べているということです。たとえばいろいろな動物を食べておりますが、鹿や猪は図体が大きいですし、一頭しとめるとその図体の大きいおかげでたくさんの肉が手に入ります。しかもおいしいです。けれども鹿と猪だけ食べているだけでは

* 國學院大學文学部教授

なくて、ウサギはもちろんの事、ムササビや狐や狸も食べます。カエルも食べます。ネズミも食べます。とにかく何でも食べているのです。そういう何でも食べるようになって、ますます安定していくわけです。つまり一つ二つの種類が手に入らなくても代わりになるものがいくらでもいるという事でいろいろな物を食べることによって、ある一定の面積の中で、あれもこれも利用することが出来るようになって別にあちこち頻繁に移動しなくても済むようになったというわけです。

縄文人はお猿さんまで食べております。お猿さんというのはまあ自分のことを棚に上げて言うのは何ですが、私の仲間には相当似通った顔がありまして、猿をしとめて肉を食うというのはあまりいい気持ちがしないというのが世界各地の狩猟民の共通の思いなのです。ところが縄文人はあまり頓着しません。終始食べております。とにかくわけへだてしない、それが一つの方針なのです。そして、何でも利用できる物は利用するという事で、彼らは生活するようになってきたのです。

それだけではなく実は、たとえばある食べ物、ドングリやトチでもそうですが、ドングリはクリと同じようなつぶで色つやもおいしい食べてみたいと思っても自然の状態のままではアクが強くて食べられません。そういうことでやがてアクを抜くということに成功します。そしてまもなくドングリだけでなく彼岸花の球根とか、いろいろなアクの強いもの、多少の毒のあるものの毒抜きにまで手を伸ばしていきます。あるいは魚においても我々が珍重しておりますフグも縄文人は縄文時代の前期以降には食べ始めております。そしてそれが結構彼らの好物だったらしく、海岸から離れた奥地の貝塚や遺跡からフグの骨が出土しております。だからすでにフグの毒を抜いて食べるということまで身に付けていたということがわかります。

さらにある種の植物については栽培するようになります。エゴマ、ヒョウタン、ヒョウタンももう相当早くから、今日発表がありました池内遺跡からも必ずヒョウタンが出るのではないかと思います。あの時代からヒョウタンを北陸地方では食べております。それはおそらく栽培していたのだろうと言われております。その他いくつかその栽培の候補があがっておりまして、場合によるとソバも栽培していたのかもしれないという可能性が北海道でも見出されております。

その他に彼らは犬を早くから飼育しておりますが、その技術的なバックグラウンドを基にして、やがてイノシシを飼育するようになります。このイノシシの飼育は縄文時代の早期に始まります。そのきっかけが伊豆の大島に、ある縄文人の集団が渡ろうとしたときに始まりました。伊豆の大島は火山島ですからイノシシあるいはシカは住んでいないのです。ところが発掘すると累々とイノシシの骨が出てくるのです。これは彼らがイノシシを連れていったからに他ならないのです。ところが彼らの船は丸木船です。太い木をくりぬいて、船を作ってそれに彼らは家財道具を積んで、女房子供も一緒に連れて海を渡るわけですが、その時にイノシシの成獣(大きくなったイノシシ)を連れていったのでは船が狭くなるので、子供のイノシシ数頭を連れて行って、それを島に着いたら飼育して大きくなったら食べるということを始めたようです。

私も外国生活の経験があるのですが、一番困るのは日本のお醤油の味やうまいお米が食べられないということでした。縄文人はシカとイノシシが好きでしたが、島に渡るということは、シカやイノシシ、つまり僕ら日本人にとっての米食を諦めろと言われるようなものなのです。そこで、苦労して彼らはイノシシの子供を連れて行って飼育するというようなことを始めたというわけです。

こうして今くどくどと申し上げましたのは、縄文時代の文化を支えた底力というようなものがそう

いうところにあるということです。つまりただ自然のものを口に運ぶということではなく、アクのあるものはアクを抜く、必要とあれば適当な種類を選んで栽培するようになる。それから毒のあるフグならそれを抜いて食べる。そしてイノシシを連れて行ってちゃんと飼育する、そういうことをちゃんとやったこの底力がこれからお話しするような縄文文化を支えた大きな力になっているわけです。

このような技術を、私は縄文人による自然の人工化と呼んでおります。自然を自然のままでなく、自分の都合のいいように作り変えていく、そして利用していくということです。こういう考え方は実はまだあまり学界でも出ていない考え方です。少し栽培があると、すぐにそれを農耕だと言ったりします。しばしば縄文時代にも農耕があったとか、原始農耕があったというような話は実は幾つかの栽培作物があるとそれをもって農耕だというからです。ところが農耕というのはですね、実は本当の農耕のその性質というのは、ごく少数の限られた栽培植物に時間と人手を一生懸命かけて、そして収量を上げて安定しようとするにあるのです。それが農耕なのです。ところが縄文時代というのは先ほども申しましたように、お猿さんまで食べるようにいろいろな物を食べておりますが、そういういろいろな物を食べることによって安定しようとするのです。だからいろいろな物を利用する。それに対してごく少数の種類を利用しようとする農耕とは相容れない姿勢なのです。縄文時代のその性質を私は縄文姿勢方針と呼んでいるのです。縄文人の生きる方針です。この姿勢方針は農耕とは反対の方向を向いている。けれども栽培ということもやっていた。その栽培は縄文姿勢方針を全うするために、あるいはさらに充実させるための一つの手だてであって、農耕ではないということです。そういうことで縄文の性質が弥生時代以降の在り方と際だった特徴をもつものとして見えてくるということです。

さて実は縄文時代の人達は、一カ所に留まって定住するようになったという話をしました。けれどもその定住こそが、この多種多様な物を利用することが出来るようになった大きな背景になります。毎日朝起きて、あちらこちら移動しながら食べ物を漁っているというような生活は、その場その場の関係が一回こっきりあるいは一時的なものにならざるを得ないのですが、今度一カ所にずっと住み続けるということによって、その場所を取り巻く自然と年間を通じ、あるいはさらに何年間にも亘ってつきあうということになってきたわけです。それによってまわりの生態学的な知識、植物、動物、昆虫、鳥などに対する知識が深まっていきます。そしてこれが食べられる、これが食べられないものと区別します。おそらく名前をみんな付けていったはずですが。そしてこれが毒であるとか、一方これが薬になるとか、そういうものを区別していくわけです。

そういう知識が、一方で膨らみながら彼らの生活の根拠としての家造りが始まります。竪穴住居です。移動に移動を重ねて、夜になると簡単な寝場所を造るというような、そういう生活におけるいわば鳥の巣みたいなものはですね、すぐに捨てられる。そして捨てられるとたちまちそれは自然に戻ってしまいます。ところが一カ所に住み着くんだぞというこの決意のもとに家造りを始めた。それがいわゆる竪穴住居と申しまして、地面を一定の広さに決めて掘り窪めます。そして床面を地面より下の方に造ります。そして壁をちゃんと造り、柱を立て、梁を渡して屋根を葺くという家を造るわけです。この家造りというのは一つには重要な意味を持っておりまして、おそらく狩だとか魚取だとかそういう時に共同で作業する、そういう食物を獲得する時の作業以外で初めて共同で一つのものを造るということをやった最初のものが竪穴住居ではないかと思えます。

ここにも縄文人にとっての新しい社会的な出来事が始まったということを意味しております。そして一方、その竪穴住居というのは、今までに自然の中には全くなかった新しい空間を自分たちが自ら新しいスペースを造ったということにおきましても極めて重要な意味を持ちます。この竪穴住居を造って、そして壁で囲った。壁で囲うことによってその家の外側と内側とはっきり区別されます。少し言い過ぎかもしれませんが、私はこのとき日本語としてのウチとソトという言葉及びそんな言葉に関わる観念が芽生えたのではないかというふうに思っております。換言すれば、もしかしたらそれまではウチとかソトという言葉が無かったのではないか、あるいはウチとかソトという言葉で表されるような観念はまだ無かったのではないかというふうに思います。

私たちの日本語というのは、もちろん新しい言葉も最近どんどん加わっておりますけれども、古くから使っている言葉もたくさんまだ残っております。ずっとさかのぼっていきますと、万葉の中にもたくさんの今我々の使っている言葉のルーツがあります。万葉集を作った時に初めて日本語ができた訳じゃ無いということはもちろん皆さんお思いでしょう。じゃあお父さんの前の代なのか、あるいは2代・3代前の時代に日本語が出来たのかというと、そうじゃないですね。あれだけ楽しい流暢なそしてリズミカルな日本語を駆使することが出来るようになったということは、ものすごい日本語の歴史がその奥にあるということをよくよく示しております。その日本語が縄文時代にもつながっているというわけです。そういう意味で、私は考古学は遺跡や遺物やそれから遺構だけとかそういうものではなくて、日本語をもって考古学をすると、そういうところをこれから考えるべきではないかと思いはじめておるところです。ちょっと脱線しましたけれども、とにかく竪穴住居を造るということによって新しい人工的な空間を作った、そしてこれは今までになかった自然の中の一つの空間として、その竪穴住居の内側と外側、ウチとソトこういうものができたんじゃないかと、そういうふうに思います。

竪穴住居の中には炉が設けられました。壁に囲まれた内側に炉があるということによって、さらにその新しい空間スペースの性格というものがはっきりしてきます。その炉もやがて石で囲ったりします。丸く囲ったり、四角く囲ったりします。またそれをちょうど箕のようにおもしろい形にデザインしたりします。ある時ある地方には、その傍らに石棒を立てたり、男根をかたどったようなああいいう特別なものです。あれを炉の傍らに立てたり、あるいは横たえたりしています。あるいは炉のそばに土器を埋めたりします。火鉢のように。さらにある時には奥壁に石で祭壇のようなものを作って、そしてその真ん中に自然の細長い石を立てたりします。まさに祭壇そのものです。いろいろそういうものを設けることによって、ますます竪穴住居の中は外にはない全く新しい意味を持つものになってきます。いろいろな民話の中にもありますが、炉の火というのはですね、あれは明かりを採るとか、暖房用とかあるいはものの煮炊きをするためとか言う以上にその炉というものが、その家のシンボルになっていきます。ご先祖様からの火だとか、あるいはその火をずっと守ることがその家を守ることにとか、そういう観念も出てきたりします。ですから炉が設けられて、炉を持つそういう竪穴住居の空間というのはますますその自然とは別の新しい空間としての新しい意味を備えていくということになります。そういう中で家の内が一つの精神的な世界としての構造を担っていくという、そしていわば家だとか、家系だとかそういう観念を生む土壌にもなっていったというふうに考えることができます。

ところで家の外に出ますと目に写るのは仲間の家です。仲間の家が群がっていて、それが実はムラ

なのです。このムラもですね、それまでの例えば四六時中移動に移動を重ねているような生活の中で、仮の宿的な寝場所を作ってそしていらなくなるとそれを捨てて行ったというようなそういう鳥の巣みたいなものではなくて、人工的な新しい構築物としていくつもそこに群がっている。これによって一定の範囲の空間を自然の中から切り取って、自分の物として占有して、そこから自然を排除していった、こっちの勝手だけで一つのムラを人工的にデザインをするということにつながってくるわけです。ですからムラというのは単に複数の家が集合したということだけではない、集まった家と家がお互いに関係を結びながら一つの機能といいましょうか役割を担って新しい形を作り上げるものなのです。その典型的なものを私は縄文モデル村と呼んでおりますが、広場を囲んで堅穴住居がちょうど手を繋いで輪を作るようにぐると廻るのです。こうやって家というのが単なる雑多な集合ではなくて、約束事の基に一つの新しい空間を作るというそれがムラの誕生です。円形に並んだその中やあるいは内側、あるいはその並び方にも決まりがありまして、その中にお墓が設けられたり、あるいは今日の発表の中にもありましたが、貯蔵穴、穴蔵ですね、食物を貯えておく穴蔵を設けたり、あるいはある場所を決めてゴミ捨て場にしたりというような、そういうデザインができあがっていきます。このムラというのはやはり重要なことでして、家というのはそれぞれの家族の私有物です。つまり私有権を持っている人達同志が集まりながら公の一つの空間を作ったというのがムラということになるかと思ひます。

我々が遺跡を発掘しますと、大規模な遺跡であればあるほどですね、長い間そこに住み続けていたということを我々に教えてくれます。これはいったいどういうことなのだろうという素朴な疑問から入ってみようと思ひます。やはり生活条件が整っていたということを何よりも示しているだろうと思ひます。だから何回も何回もあるいは長い間そこに住み続けている。その生活条件というのは何かというと、第一にそれぞれの人達が必要とする面積、それから具体的には平坦面がどれくらい広がっているかというようなことから、自分たちにとってどう必要とされるかという兼ね合いの中で場所を選んでいくのだと思ひます。それからもう一つ、場所はよくても食物の手に入りにくいような所では困る、だから食糧資源も豊富でなくてはならない。その周りにちょっと遠征すれば十分に食糧が手に入る、そういう場所ではなくてはならない。それからもちろん生活に必要な水の便が良くてはいけません。だいたいこういうような事がその生活に必要な条件として考えることができます。群馬県の茅野遺跡というのがありまして、これは耳飾をたくさん出土した遺跡として注目されておりますが、その遺跡の低い所をちょっと見当つけて掘って見ると、見事な縄文時代の湧水の跡がでてきました。その湧水は今枯れておりますが相当な量が出たということを示すような、そういうような谷が入り込んでいる奥まった所にちゃんとありまして、そしてその場所にはたくさんの石斧だとか石皿だとか磨石だとか彼らがその水辺でいろいろな作業をやっていたことを思わせる道具がいっぱい発見されました。

いろいろな遺跡がそのそばにあるのですが、それだけの水量を思わせる泉を持っている遺跡は他にありません。つまりこの茅野遺跡というのは水の条件のいいところを占領して、そういうところを占領することが出来るという力を持っていたのです。それだけの力があつたからこそ一方では驚くべき数の耳飾を持つことが出来て、そしてその耳飾をおそらく近くの人々に分け与えるようなそういうことを思わせる集団、というふうに思われます。つまり場所によってはその人達の強大な力をも良く示

してくれるということがわかります。

ところがそういう私達が今考えつくような事だけが彼らの生活の必要条件だったのだろうかという
とどうも一つわからない所ができました。最近、実は去年のことですが津軽海峡を越えた北海道の
函館市に、函館空港のための工事を行っている時に、ものすごい遺跡が発見されました。中野B遺跡
という遺跡なのですが、これはまだ縄文時代の早期、つまり縄文時代が軌道に乗り始めたそういう時
代のものなのです。ところがその遺跡に行きますと、足の踏み場もないほど堅穴住居が累々と出てく
るのです。縄文時代早期というと堅穴住居そのものもまだまだ試行錯誤で造っているというようなイ
メージが我々にもあったのですが、それがなんと弥生時代や古墳時代真っ盛りの時代の村の跡みたい
にびっしりと縄文時代早期の堅穴住居が500軒以上も出てきたわけですね。それは先程申し上げたよ
うな水の便が良かったとか、食物の入手に便利だとか、あるいは必要な平坦面があったとかという
事だけなのだろうかと思うと、同じ様な条件がすぐ隣にもあるのです。それは海岸に面しておりまし
て、その海岸に流れ込む川が幾筋もありまして、その川と川に挟まれた所にその中野B遺跡というの
があるのですが、そういう目で見ると全く同じ条件の地域がいっぱい並んでいるのです。ところがな
ぜか中野B遺跡というそのある一つの場所だけ、ずっとここだけに集中して他の所には目もくれない
で住み続けて居るという事を示している。しかも堅穴住居というのは先程も申し上げたとおり、地表
を掘り込んで床を作るのです。その時安定した床面ができます。火山灰の上に、黒土よりは赤土の上
に作った方が、安定した硬い面ができます。だから生活する床としては理想的なのです。ところが何
回も何回も同じ場所を掘りますと（よほど深く掘れば別ですが）、ある所はちゃんとした床面が確保出
来るが、他の所は黒土になっている、つまり前の堅穴住居があったところで、そこはもう傷んでいる。
一方床面だけでなく、壁も赤土の中に掘り込んだ方が、床面からちょっと立ち上がる立ち上がりが
あって、壁も頑丈に確保できる。ところが何回も何回も同じ所に堅穴住居を造ると壁ももうグスグス
の黒土になっている。ああいう黒土の所に皆さん畑仕事をしながら畝が壁にならず、すぐ崩れてしま
いますね。そういう状態にも関わらず、同じ所に堅穴住居を造っているのです。ちょっと隣を見ると
何メートルも離れていない所に同じ条件の所があるのにそこには目もくれてない。だからここにこ
だわる何かがある。だから私が先程申しました水の条件だとか、食糧の手に入りやすい所とか、必要な
面積だとかだけでなく、どうも彼らはここぞと決めた所にはプラス α を見つけていたのだと思う。プ
ラス α があってその場所を決めているということを暗示してくれます。プラス α というのは、なかな
かプラス α としかいいようのないような、今の時点ではそのとらえ所のないものなのです、残念なが
ら。つまりどういう事かと言いますと、自然的なその条件とか物理的な条件ではなく、どうも心の問
題、その心のこだわりみたいなもの、どうもそのプラス α というのはですね、そういう自然のこだわ
りがどうのこうのではなく、別のこだわりを持っていそうだとすることが臆気ながらここに見えてく
るわけです。

実はそういうものについて長らく気にはしていたのです。例えば数年前のことです。長野県を走る
高速道路の工事の時に、長野市の東に松原遺跡という遺跡が発見されました。そしておもしろいから
見に来ないかというお誘いを受け見に行ったのです。そしたら一番下の方、つまり一番早くその松原
遺跡に住み着いた人達は縄文時代の前期という時代なのです。縄文時代は六つの時期に分けておりま
して、前期というのは草創期・早期・前期、三番目の時期です。その三番目の時期に人が住み始めた

のです。三番目の時期の早い頃に。その次にちょっと人がいなくなるのです。そしてまたしばらくすると、また人が戻って来て住みます。それが縄文時代の前期のおしまいの方です。それからまたいなくなるのです。それからまた今度は縄文時代中期の半ば頃、四番目の時期の中期にまた人がやってきて住むのです。中期に住んでまた一旦人が居なくなるのですが、中期の終わり頃またやってきてそして後期のはじめ頃まで住みます。今言ったように何回もいなくなってはまた戻ってくるのです。そして次に弥生時代に入ってまた人が住みます。いなくなります。それから古墳時代にまたやってきて人が住みます。それからその古墳時代のうちにいなくなって、奈良・平安時代にまたやってきて住みます。その後、近世の遺跡、江戸時代の遺跡がまたそこに重なっているのです。その松原遺跡という所に、その遺跡に立って見ると、ここが遺跡の範囲というのは掘ってみるとわかるのですが、地上からは何の変哲もない平らな広がりなのです。ところが何回も住んで、いなくなってまた住むという所は範囲が限られている。ほとんど平坦で平らな場所なのです。これには私は非常にびっくりしました。なぜここにいろいろ時代を超えて住み続けるのだろうか。その理由は先程申し上げたような生活条件とか何かというような自然環境の条件とか言ってもそれだけでは説明できない。なぜここにいるのか。私はこれを屋根のない洞窟遺跡と名前を付けました。洞窟ならちゃんと庇があって雨露をしのげるような、天然の格好な雨露をしのぐ空間がありますから、洞窟があればそれを見てここで雨宿りをしようとか、ここにちょっとしばらく住んでみようとか、ここでキャンプを張ろうとか、そこを通る人は洞窟の外よりは洞窟の中でというのでそこで休んだり、洞窟だからということでそこで住んだり生活したり、時には洞窟だからということでそこを墓場にしたりするのです。ところがここは全く庇も何もないのです。だから変な表現ですけども、私はこういう遺跡を屋根のない洞窟遺跡と呼んだのです。

そういうふうに見ていくと、実は屋根のない洞窟遺跡がたくさんあるのです。もし屋根のない洞窟遺跡のそのプラスα、彼らのこだわりの何であるのかを突き止めれば、我々は遺跡の分布調査なんていうものに時間をかけなくてすむし、試掘調査も効率よく、ここは絶対人が住んでいるはずと同じレベルで考えればわかるはずなのです。ところが僕等は今わかりません。相当秋田県の人や東京の人から比べると自然と仲が良いように見えますが、その秋田の人でも藪の中にトレンチを入れたりしながら掘ってみてこれは遺跡だ、ここは遺跡ではないということを一生涯懸命確かめているのです。けれど、もしこの心がわかれば、ここは遺跡だという事をちゃんとマーク出来て、必ず遺跡だぞということになるはずなのですが、残念ながら僕たちはわかりません。どうも江戸時代の初めくらいまでは、その土地土地に住む人達は、ここがとてもいい場所でちょっとはずれるともうだめなんだという事がよくわかっているのです。いたはずなのです。縄文時代以来からの伝統的な自然を読む力です。ところが僕たちにはもう読む力がありません。そうするとどういうことになるかというと、こういう場所がいいんだという、ただ単なる思想という非常に抽象的な次元で、ある場所がいいとか悪いとかという、あるいは方角を見るとかという方位の思想とかいうそういうのがでてきます。あれはちゃんと自然に則って読んでいないんじゃないんですね。しょうがないから思想ということを作り上げて、そして後ろに山があって、南向きで、川がずっと流れている所、それが最も理想的な場所なんだというようなことでごまかしている。どうも思想というのはだいたいごまかしなんですね。風水思想なんかも一つの典型ですよ。ごまかしてやむを得ずその本質に近いところでしか本質が見えないから、しょうが

ないからもうエイヤーともうこの辺だぞといって、済ましているんです。

それはそれとしまして、とにかくここにはまだ現役で遺跡の調査をしている人がたくさんおりますが、そういう皆さんには是非こういう屋根のない洞窟遺跡をちょっと集中攻撃して、いったいなぜそこが屋根のない洞窟遺跡として、何回も何回も時代を超えて利用されたんだろうかということを考えていただきたいと思います。いくつかの考えることがらにつきまして、これから一つ二つあるいは触れる事ができるかもしれません。

さて、家ができることによって私の場所が確保されましたし、この家にはいろいろな意味があると言いましたけれども、もう一つだけまた別の面から言うと、その私有地あるいは私有とか、私有権みたいなものが、竪穴住居を造るようになってからやっぱり芽生えてきたこと、縄文時代というのは原始共同体で、みんなが平等で何を利用しようと好き勝手に、そして理想的なものであると思ったら大間違いである。やっぱり家をどこに造るというのはある一つの台地の上でも、あるいは一つの中央広場を囲んでそして丸く輪を描こうとしても、その中で南向きとか北向きとか、今日も池内遺跡の話の中でなぜ北側に住居があるんだろうとかいうような、今我々からみると条件が悪いんじゃないかというところがある。彼らにとってどうだったかわかりませんが、彼らにとってまた我々とは別の観点で、ここが良い場所だ、ここが悪い場所だというような所があるのです。それから先程申し上げましたように、力の強い物持ちの遺跡がすごく立派な泉をちゃんと抱え込んでいる。他の村は、その立派な泉のソトにある。そういったようなことから考えても家を一軒造るにもちゃんとしたいい場所、悪い場所があるんですね。だから現実的にこういう家ができます。できるんですけれどもこれは一回決めたらですね、だいたい決まりで私はこの場所、おまえはこの場所と決まっているんですよ、どっちも。ところで一つの村に住み始めますといろいろな理由があるんでしょうけれども、ずっと途方もない長い年月住むことはできないんです。つまりゴミや排泄物で不衛生になる、周りの自然がちょっと条件が悪くなる、食物も採りにくくなる。そこから相当遠くまで遠征しないと必要な食物が手に入らないというようなそういう時には村を移動するのです。移動するんですけどもちゃんとした村を営む場所というのはもともと場所が良かったからここに家を造っているわけで、いなくなっても、回復するとまた戻ってくるんです。戻ってくるとどうするかというと、同じ場所に竪穴住居を造るのです。空いている所に造ってないのです。何回も何回もそういうふうにとどこかに行っては戻ってくるうちにもうビッシリと竪穴住居が並ぶ場合もあります。先程申し上げました中野B遺跡というのは何回も外に出ては戻ってくるものですから、ビッシリと足の踏み場も無いほどに古い竪穴住居がワーと残されたようになるんですが、ちょうど適当な竪穴住居の数の村の遺跡だとだいたい同じ場所で重なっているのです。だからこれは明らかにAさんはこの場所以外の他の所に造ってはいけません。なぜなら他の場所はBさんのものであり、他の所はCさんの場所なんです。あるいは、ここは広場で公共的なもの、お墓が作られたり、貯蔵穴が作られたり、それぞれまた使われ方は別です。お祭り用に使われたりとか、だからもう決まっているんですね。そういうことから私有あるいは私権みたいなものがすでに縄文時代にもあったというふうに見ていく必要がある。そういうふうに見ることによって縄文時代の社会とか集団のその生活、あるいは社会のしくみみたいなものが、ただお猿さんやチンパンジーのようにずっと動き回っていて、夜になると適当な所に場所を選んで眠っているというようなものではない、ちゃんとお互いの関係の中で場所が決まっているんだということを考えなけ

ればいけないと思います。

それで私はちょっと穿った見方をしているんですけども、この中には、非常に縄文人の中にもあるいは我々にもあるんですけども、自分の場所に戻ってきた時、本当に自分の場所の狭い範囲で堅穴住居を造り直す人と、ちょっとはみ出して、ほんのちょっと引っかけてから俺の場所を忠実に守っていますよ、他の場所には行っていませんよと、従来の場所からはみ出して造る奴がいるのです。控えめな人は従来の場所をはみ出さず、そのまま踏襲するんです。これを私は専守防衛型、それに対してはみ出す方を攻撃型と呼んでいるんです。いろいろな個人的な性質、個性みたいなものが見えてきておもしろいわけです。あるやつは専守防衛でちゃんとおとなしく自分の堅穴住居の上に造るのに、他の奴はちょっと足を引っかけておいて造るのです。私心というのがここに出ている。

それはそれとして、こういう私があって実は公的なムラという空間を作ったのです。こういう意味でおもしろいのですが、そして実は公的なムラができた時、またムラの内側と外側とが区別されます。ムラというのは人工的な空間として、人工的な空間というのは自然を排除して自分勝手な縄文人が縄文人的な空間として独占するんですね、自然の一角を。自然から切り取ってこれは俺達の場所なんだという時に切り取られたそのソトは実はハラなんです。お猿さんやチンパンジーやそれから日本の縄文時代以前の旧石器時代というのはこういう人工的な空間で自然を排除したようなものを持たない時代ではですね、全部これが一緒になっているわけですね。だからこういう区別がないわけです。ところがこの区別ができたということはこれが人工的な空間として全く自然を排除した一定のものを作る、そして自然に対立するわけです。こうやって実はムラとかハラというのもこれも古い言葉だと思いますが、日本語で考古学をやるとこういうところにも踏み込むわけです。こういうハラは実は人工的な範囲の外に広がる世界です。ところがこのハラは自然の世界なんですけれども、自然一色ではなくて、このハラで食料を調達するんです。そしていろいろな道具の材料、石斧を作る時の石だとか、石斧の柄だとか、鏃(やじり)を作る材料だとか、それからさらに家を造る時の柱だとか、萱葺きにする萱だとか、そういう物を調達する場所でもあるんですね。だからこのハラというのは、人と自然が共生している空間なんです。自然が広がっているんだけど、人間が縄文人が積極的に入り込んでいて、材料を取らせてもらったり、食べ物を調達したりと、そういう場所としてのハラという性質を持っています。だからここに人の空間としてのムラ、そして人と自然が共生する場所としてのハラの境目がムラ境であり、ムラ境の内側と外側が対立するということになるわけです。

このハラの特徴はですね、いろいろな所に名前が付くのです。このハラっぱには名前が付きます。例えば川の名前とか、大きな石の名前、岩の名前、崖、巨岩がずっとそそり立つような、そういう崖にも名前が付いたりします。それから巨木、巨木なんかでも、例えば日光には太郎杉というのがありますがし、妙高の方には黒姫太郎というのがある。屋久島には縄文杉というあだ名を付けられたのがある。皆固有名詞ですよ。おおきな木なんかにもみんな固有名詞が付くのです。岩にも付きます。そして川にも、川の名前だけでなく枝川、それから水の湧き出るところ、浅瀬、それから淵とか、そういうのにも全部名前が付きます。それはちょうどアイヌの人達のアイヌの地名を見ていくとそれが良くわかります。いろいろなところに、何でもこんな所までと思うほど細かくみんな名前が付いているわけです。それはハラだからです。名前が付いている所から、その村から外に出た人達の自然と共生する証しです。そういうスペース(空間)なんです。ところがその名前には彼らのいろいろな思惑と言いま

しょうか、物語とか世界観とかそういう物がみんなそこに転化されるわけです。今だったら弘法大師が座った岩があるんですね。それから木曾義仲が通りすがりに休んだ岩だとかどこにもあるんです。たぶんここには大館市史の民俗編を見ればいっぱい出てくるんじゃないかと思いますが、そういう物語がやっぱり付くんです。あるいはここはフナがいっぱい捕れる場所とか、ここでサケも捕れるとか、なぜそこでサケが捕れるのかということまで後で理屈を付けて、そして物語を作るのです。私は毎年木曾の御嶽山、信州の開田高原というところで考古学の発掘実習をやっているのですが、あそこの開田村というのはそんなに古い村ではないのです。近世の村なんです。その村に入っているいろいろな見聞きしましたら、そういう研究をやっている人がおまして、ここは血の池と言うところ、それは上流の方で大変な大合戦があって、そこを引き上げた侍がそこで血刀を洗ったんだ、それからここは真っ赤な池になったんだと。これは酸化鉄が浮いている池なんですけども。そういうふうにみんな名前が付いているんです。近世のそんなに古い村じゃないのですね。物語は大きな石には付いている。それから冷たい川のところには冷川と言ってそこにはちゃんと名前が付いている。みんな名前が付いているのです。そうやって自然と一緒に人が共生する場所なんです、さて、その向こうには実はヤマがあります。ハラの向こうにヤマがある。だいたい日本の風土からいうとこういう一つの連続性が見られるわけですが、そのヤマも単なる風景じゃないんですね。目の中に飛び込んでくる単なる風景ということではなくて、自分たちの生活空間として、このヤマは何のヤマとみんな名前が付くのです。今ここに住んでいる人、それからそれぞれの国に帰って、いったい自分たちがどれくらい目に見えるそのヤマの名前を知っていますかね。僕は新潟県の長岡ですけれども、そうですね東と西の方に信濃川を挟んでヤマが見えます。ヤマ並みが、そのうち東の方で僕でも10ぐらいはわかります。たった10です、残念ながら。みんな地図を見ると名前が付いているんですけど、普段見て言えるのは10ぐらいです。西の方では10はないですね。5つ6つくらいです。西の方は遠いんですよ私にとって、ところがあれはわざわざ登ってこのヤマの形はこうだからと付けているのではないのです。みんなこっちから見て名前が付くんですよ。そういうヤマも単なる風景じゃなくて、名前が付いて、物語が付く。それを私は由緒と呼んでいます。だから自分たちの目で見えるそのヤマ並みの特に特徴的な形をしたものには物語がある。そしてその由緒を知ることによってそこに生まれて育ってという自分意識みたいなものですね、染みついて行くんです、刷り込まれて行くんですね、心の中に。

例えば縄文時代にも相当おもしろい事実がいくつかあります。群馬県の中野谷松原遺跡という所は縄文時代前期の遺跡なんですけれども、そこからは浅間山、しょっちゅう煙を噴きます、そして何回も爆発していますが、浅間山が良く見えるんです。そしてその中野谷松原遺跡では丸く広場を囲んで竪穴住居が並んでいるんです。そして10軒程度ですので、全部が全部手を繋いで一つの輪を造れないんです。そして空いた所をどうするかというと、お墓を作るわけです。だからこれもおもしろいことなんですけども、村は今生きている人とご先祖様(死者)と共同経営なんです。そうやって一つの公的な広場を囲んでいるんですが、この墓穴みんな同じ方向を向いて並んでいるんです。そして片側にいつも自然の細長い石が立てられているんです。ちゃんと立ったまま、中にはもう倒れかかっているものもあります。残念ながら人骨はもう腐って残っていないんですけれども、耳飾が発見されました。発見される場合は立石の側から発見されます。だからどうもそっち側に頭を置いて埋葬されているんです。調査を担当した大工原さんはいろいろ見ていたら、なんと立石側の延長線上にきれいな三角山の

浅間山が見えるのです。つまり全部の墓が浅間山を向いているんです。ある人はこれを偶然だという。しかし、それが偶然ではないだろうということは、たくさんの例がありますから、段々賛成してくれる方が増えると思いますが、それでもこういうものが偶然だと言う人は相変わらずなくならないと思うんですね。皆さんには私は今こういう事実の宣伝期間でございまして、一生懸命こういうお話しをしているんですけども、これを偶然だというのなら、それは縄文人に対しての侮辱です。目に写る山はですね、単なるそこを通過する旅人の目に写る風景というような物じゃないんです。ここにずっと生まれてそして死んで行った人達の目に写った、きれいな浅間山がポッカリ浮いている、それを特別視して、それを浅間かどうかは知りませんが名前を付けて呼んでいたんですよ。そしてそれが爆発したり煙を出したりしています。そこで、浅間山を向いて祈り、もしかしたら死ぬと浅間山に帰るのかもしれない、例えばですよ。どういう理屈で彼らはそっちに頭を向けているのかはそれはもう知ることは出来ません。けれども例えばそういうような由緒を自分たちで作りながら向き合ってたんです。

長野県には阿久遺跡というのがあります。これも縄文時代前期なんです。つまり同じ頃、こんどですね、蓼科山を特別視しているのです。蓼科山もきれいなものです。これは三輪山と同じ形なんです。三輪山というのは古い神社の発祥地なんです。富士山のミニチュアのように左右対称形のものですから、三輪山型とか、あるいは神様が宿るところといって神備型という名前で、こういうきれいな姿の山を呼んでいるんです。

浅間もそうですけれども実は今申しましたように蓼科山も阿久遺跡から見ますとちゃんとそれが見えるのです。そしてその阿久遺跡から望めるその蓼科山を気にしながら大きな石を文化の中に取り込んでいきます。先程は自然の人工化の話をしましたけれども、実はこれを自然の社会化と呼びたいと思います。縄文時代の歴史というのは定住して、そしてムラを作って、そしてムラにその生活の根拠をおいた人達が、周りの物にみんな由緒を付けながら、言葉を換えて言えば、皆物語りをそこに創作しながらですね、自然を自然のままとしておかないで、そういう風景として置くんじゃなくて、自分たちの世界として作り変えるんです。

そしてその向こうには実は山の向こうにはソラがあるのです。ハラが自然と人工との共生の場だとすると、ヤマというのは実は自然なんです。人工色が無い所、人工の及ばない所、人の及ばなかった所、ヤマというのは越える所なんです。越えるとまた新しいよその国が広がる。ところがソラはですね、そのヤマを超えたところでソラにゆける訳じゃないんです。もう少し次元の高い、いわばちょっと、大急ぎで話をすると、それは神の世界、人知の及ばない雷様が住んでいたり、雲がどこからともなく湧いたり、雨を降らせたり、雪を降らせたりですね、星が輝いたり、お天道様があっちから出てこっちに沈んだりとか、そういう不思議な事が起こる。そういうそのソラという別世界があるんです。

こうして実は堅穴住居を造って、彼らが新しい私的空間を身に付けると共にムラという公的な人工空間を作って、そしてそのソトにハラという、人と自然が共生する場を作って、そしてその向こう側にそのハラを区切るヤマを作って、ヤマを見て、そしてその向こうにソラが見えるというこういう構図を作り上げた。正に私はこれを縄文時代を考える時には重要なものになるだろうというふうに考えます。また後ほどもう少しこの裏付けを一つ二つ触れてみたいと思いますが、こうやって家のウチからソトに出るとムラがあって、それは人の空間なんですけれども、これはいわば自分が足で立

つ場所、つまりこれは近景です。そして広場が見えたりとかですね、自分たちの日常寝起きする人の空間。そして次のハラは中景になります。ムラのソトを見ると中景が広がっている。それは人と自然が共生している場所です。そしてその向こうにヤマがある、遠景だ。これは自然の世界、だからそのヤマ芋とかヤマ犬とかというのはですね、犬に対するヤマの犬で、オオカミで自然の犬なんです。ヤマ芋というのは里で作る芋に対して自然の芋なんです。これも古い言葉なんです。ソラというのはその向こうに背景となって、そしてこれは神の世界なんです。滅多に行けない、だからこのソラに対しては、いろいろなその思いがそこに反映されます。ある時は死の世界であったり、ある時は天国だったり、あるいはあるときは神様の世界であったりするわけですね。

それをとりもつのが鳥なんです。これは全くの駄洒落ではないのです。世界的に鳥が死者をあの世に運んだりというのはみんなこういう構図だからです。こういう構造が、弥生時代・古墳時代にも継承されていますが、縄文時代の定住生活の中から生まれてきた。これが縄文人のランドスケープであり、我々の原風景になっているのであろうというふうに思うわけです。

さてノラというのがあります。ノラについて考えてみましょう。ムラというのは人の空間で、ハラというのは人と自然が共生している空間なんです。ノラは、ノラ仕事などというのでわかるように、畑とかそういうものなんです。ハラの中に人工的な空間を無理矢理作ったところのものです。耕地、ノラ仕事のノラはみんな農作業に関係します。だからムラ、ハラなどとともに(ラ)が付いていて、関係しているんです。このノラが出てくるのは、弥生時代以降です。縄文時代にはだからノラのないランドスケープなんです。風景、景観なんです。

ところでこのムラが人空間として独立し、自然の一角を切り取り、ムラができていますけれども、そのムラの中にさらに縄文人は積極的な働きかけをするようになります。それが記念物、モニュメントを作ることです。ストーンサークルとか、土を盛り上げたり、それから太い柱を立てる。この三つが記念物の主要なものです。石を使って作る、土を動かして作る、巨木を打ち立てる、この三つがこの記念物の特徴なんです。この記念物を村の中に作るわけです。ムラというのは先程申し上げたように、家が集まってそして人工的な空間を作って、自然を排除したわけです。そしてもちろん広場を作ったり、お墓を作ったりとかそういうものが備わっていくわけですが、さらにその上彼らは記念物を作ったということは、もっともっと非常に顕著な、目に見えてアッと一目でわかるような、そういうものをわざと作って加えている。記念物の特徴は、石を持ってきてですね、それをズーと丸くデザインして“どんなもんだい”というふうにして誇って見せるようなものなんです。目立つものですね。それから土を盛り上げていく、そうすると平らな所に全く人が作るんですから、自然のものじゃない、人が作ってどんなもんだいというのを見せていくのです。それから柱を立てる。自然の中にも巨木があります。老樹があって巨樹がありますが、そうじゃなくてその枝葉を払って、エッチラオッチラ太いのをムラに持って来て、おっ立てる。どんなもんだいというそういう目立つものです。小さな石をですね五つ並べてもそれは記念物だとは言わないんです。やっぱりこう目立たなくてはいけない。規模が大きくなってはならない。だからこれの特徴は人手がかかる。だから日常的な衣食住に関わるいろいろな仕事(作業)とは桁外れに人手が掛かるんです。堅穴住居などは確かに共同作業のはしりだと申し上げましたが、そういう堅穴住居なんかは住むための家ですから、記念物と比べると相当短期間の内にさっと作ってしまうものなんです。これはとてもそんなものじゃ

ない。大勢の桁外れに多人数を動員して、しかも長い年月が掛かる。そして大規模で目立つやつを作ったというのが記念物なんです。この記念物をムラの中に作ることによって、この人空間としてのムラの、人工的なムラはハラに対して更に際立ってくる。ただ石ををちょっと並べたんじゃない、ただ家が並んでいるだけじゃない、それを越えたすごい目立った大規模な記念物を作るということによって、この人空間としての自然にはない人工的な作り物をここに表現していく、そして自然と対立して行くわけです。土塁はですね、とにかく今だったらブルドーザーとか何かちょっとしたものがあれば、あるいはそういう大きな機械がなければ少なくともスコップを持って、一輪車を持って土を動かすことができるでしょうけれども、当時は石斧だとかあるいは今日の池内遺跡で出たようなですね、掘棒みたいな先が尖ったやつだけです、あんなもので地面をほぐすんです。ほぐした土を手ですくって、そしてモッコみたいなものに入れて、エンヤコラ運んで土をどんどんどん盛りたてて行くんです。この近くの狐岱遺跡にみられます。三内丸山にもあります。そしてついこの間新聞に出ましたけれども、函館の石原貝塚や南茅部町の八木遺跡から土盛りが出ました。土盛りの土手が。それは土を動かすといっても大変なことなんです。砂遊びの砂山の一つ二つ作るのと違って、大規模な目立つやつを作るわけですから、人手が掛かって年月が掛かるんです。

同じように石造りとしてのストーンサークル、伊勢堂岱遺跡も今日発表がありました。それからすぐお隣の大湯の環状列石、ストーンサークル、更に青森でも小牧野遺跡とかですね続々とそういうストーンサークルが見つかり始めました。そういうストーンサークルも一人や二人では持ち上げることはできてもあるいはそれを運んでゆくななんて事はなかなかできないような、舗装道路じゃないすごい山道を、足下のおぼつかないところを運ぶなんて安易なことじゃない。そういう石をどんどん運び上げるそして伊勢堂岱は九百何個を数えながら、まだ半分以下しかできていない。あれはいったい途中で止めたのかどうなったのかという問いかけもありましたが、これは人手と年月がいかに掛かるかということを良く示しているんです。あれはサーと出来るものなら出来ていたんです。しかしコツコツコツコツやらなければできなかったから、まだその建造途中のやつが残っていくんです。

一方、いつ彼らが働けるかという、極く限られているんです。雪の降る冬は出来ません。それから春になると冬中その緑のものが無いものですから、どこの自然民族も、とくに日本のような風土のところでは春になると大急ぎで緑のものを手に入れるために、そんな公共的な仕事はしてられないのです。だから春はちょっとそういう仕事は出来ません。関東地方でも雪のない地方でも、春になると大量に潮干狩りのシーズン、貝採りのシーズンが来るんです。秋は皆さんご存知のように、サケは上ってくるわ、クリやトチやドングリは色づくは、もう忙しくてしょうがないんです。そして冬のための貯えをそこで用意しなくてはならないので、だから秋もできないでしょう。そうするとようやくこういう仕事にですね時間を割けるとしたら夏ぐらいしかないと思うのです。その夏も皆が皆これに掛かりきりというわけには行かないのです。あるいは一日中というわけには行かないんです。今だったら必要な時間の間中働いて、帰りにスーパーでお総菜を買ってくれば飯を食うことが出来ますけれども、このころはそういう店があるわけじゃない生活ですから、そして冷蔵庫があるわけじゃないですから、毎日食べるものは、夏だったら自分たちで採取して食べていかなきゃならないんです。だから夏に時間を割けると言っても、このために一方では人手が掛かるというのにも関わらず、それから時間が掛かるというのにも関わらず、一年間の内の夏のほんの少しの時間しか割くことが出来ない

のです。だから長い年月掛かって、依然として完成せず、途中なのです。あれでももう50年以上掛かっているかもしれないんです。だからそういうものがあるという事なんです、これがまた記念物のおもしろいところで、目立つというものを僕たちが持つことによってですね、あっ、これは私の生まれ育った場所なんだということを強烈にその刷り込んでくれる格好なものなんです。私の田舎は長岡でそこにはなにが記念物かというと水道の給水塔です。ちゃんと見えるんです。だから写生なんかすぐしちゃうんですよ。ちょっとした屋根に上ると、市内のどこからでも見えるんです。だからあれは私にとって長岡の原風景の一つの重要な要素なんです。それから長生橋というのがあります。鉄骨のですね。信濃川に架かった今はもう第四位くらいになりましたが、長らく第一位だったんです。長さで。これもすごいものです。それからもう一つ六十九銀行、番号銀行の六十九なんです、新潟はですね。六十九銀行の建物が一番大きいんです、そのころは。だからそれが僕等の原風景を特色づける記念物なんです。

大館だったら何だったでしょう、今あるでしょうか、大館でもやっぱり必要なんですよ。例えば、何年か前にバルセロナオリンピックがありましたね。あのバルセロナにあるガウディの聖家族教会というのは、今年まで100年くらい工事をやってます。まだ出来ていない、後100年くらいかかるって言われている。しかし100年経てば完成するなんて誰も信じていないんです。何年掛かるかわからない、だけど作り続けているんです。だけど実は、これは多勢が年月を掛けているという継続を表します。継続性。そうやって継続することによって、一緒に記念物を作るという連帯感がここに生まれるんです。そしてできあがりつつあるものが目立つもので、これがオラが国サの自分が生まれた原風景として記憶に焼き付いて行くわけですね。刷り込まれて行くわけです。だからこの記念物という物はものすごく大事なんです。我々がですね、例えば何か不安で何を拠り所にしていいかわからないでしょう。だからこそ何かそういう拠り所としての記念物を、もう一度、大湯の環状列石みたいなものを皆で作らなくちゃいけないんです。大湯の環状列石を、あれをそのままというのではないんですよ。僕たちが記念物を作るとすれば、継続して、そして多勢で、年月を掛けてそしてああでもない、こうでもないと言いながら作り続けていくことによるオラがクニ意識みたいなものが出てくる。やっぱりそれがないとですね、おかしいんじゃないかと思います。

ある時は、城を造るということが記念物なんです。あれは諸国の大名がですね、権力に任せて、そして人民をただ使役しているんじゃないんですよ。使役していましたが、あれは奴隷のようにこき使われたんじゃないくて、あそこで皆食い扶持をもらっていたんです。工事に参加することによって、石工は発達し、土木工事をやり、設計をやり、監督がいて、それから建具師がいて、壁屋がいて、更に襖絵を描く人がいて、あれはものすごい大事業なんです。

だから記念物というのはそうなんです。全員でやると言うことなんです。我々の歴史は、ああいうその江戸時代だとかなんだとか、ちょっとした山城なんかでも、あれは大変なその強突張りの豪族に一方的に使役されたんじゃないのです。ちゃんと報酬、今風の報酬じゃないかもしれませんが、それがあって、合意の基にやっているんですね。だからとんでもないものができるんです。ストーンサークルでもですね、なんだか訳のわからない奴を何年もかけて営々と100年くらいかけて作っているんですよ、あれは。それは全員の合意がなければ出来ないことです。

我田引水と言われたらその通りなんですけれども、例えば、ヒントは地域にその即した博物館みた

いなものは、私はすごい記念物になると思うんです。東京都庁なんかは記念物じゃないんですよ。コッソリサッサと作っちゃったんですよ。で、あそこに疑惑が出てきたりするんですね。何年もかけていたりすると疑惑なんて出ようもないんですよ。疑惑が表に出る前に終わらせないといけないんです、そういうものは。今はそういう意味で記念物を作っていないんです。博物館なんかでも、私はそれぞれの地域で記念物としての博物館、そしてそれは内容もそうですけれども、目立つということによる帰属意識、私がここに生まれたところに、これがあったという風景。情けないことを言えばそうかもしれませんけれども、僕たちは風景の中でしか生きていられないですね。だから外国でずっと生活したこともありますし、何回も外国へ行ったり来たりしていますが、だけど外国にずっと住み続けようと思わないですね。帰ってくるところがあるから、こういう私の心の記念物があるところに帰ってくるとあるから安心して外国を廻っていられます。そういう記念物はですね、すごく人工的な空間を作って、今人とは何を求めているのか、あるいは Identity ということをよく言いますね。あれはなかなか訳しにくいんですけれども、昔は私は“自分意識”と訳したことがあります、自分意識ではもっと弱いのではないかと、私は“自分証明”、自分を証明するものは、私が生まれて私の目に写ったものです。私の写り方です。私の家がどこにあったか、そしてどこかで遊んでいた時、目を開けた時にこういう山があってということです。

ちょっと時間が過ぎましたが、一つ最後に話題を一つ。そのかわり質問無しかな。へへへアリガトウ、それが私の作戦かも。質問で立ち往生するとね、さっきの司会みたいに苦労したんじゃないから。

例えばですね、そうそう皆さんこのパンフレットをお持ちですかね。これの24頁、これに大湯のストーンサークルの絵があります。二重ありましてね、そしてここになんか真黒くありますね。左肩に、その左肩にあるのが、この小さなパンフレットの表紙にあるやつです。これ日時計と呼んでいるやつです。この日時計はですね、大湯のストーンサークルの万座と、野中堂の両方にあるんです。二つを結ぶとですね、実はこの西北の方向というのは夏至の日に太陽が沈むところの線を表すんです。これは昔、川口さんという人が既に指摘していたんです。ところが、みんなよってたかって無視して（よってたかって無視というのはなんですが）、あるいは積極的にあんなことはだめだと言う声が大きかったんです。で、私はどうもそれはおかしいなと思って、これを気にしていたんですね。で、いろいろ富樫さんとも話をしながらですね、もう一度見直したらですね、見事にやっぱりここに沈んでくるんです。それを間違えて、この二重の輪というのは、調査した人が円を書いたんです。円の中心がちょっとずれるんです。ずれるからおかしいと言っている人がいるんですが、これは後で作った中心ですからね。日時計と日時計を結べばいい。そうするとピシッと日没線に当たる。この間、雪の中、冬至の時にですねまた調べたそうです。そうするとまたこっちから日が昇る、実はこっちが東でしょ、こっちが西でしょ、で、実は、夏至の時はですね、こっちの一番北寄りから日が昇り、北寄りに日が沈みます。そして、冬至の時は一番南寄りから昇って、南寄りに沈みます。それがどの山に当たるかというものがだんだんはっきりしてきました。その例を挙げたらきりが無いというほどあるんです。だから今日は挙げません。これがまたちょっといいことかもしれません。あっ、挙げますかね、一つ二つね、群馬県ですねこれまた有力な援護射撃のところでして、天神原遺跡というのが有るんです。このストーンサークルの西側に、一人では動かせないような細長い石が三本倒れていたんです。全部

倒れきらないで、ちょうど棒倒しの棒が倒れかかって、まだ先端が付かないやつをこう起こしてやる。そして中心から望むと、真西に妙義山が見えるんです。妙義山は三峰なんです。三峰にあうんです。そして今度3月21日に僕行くことになっているんですけども、ここにですね、春分の日はこの妙義山の三峰の真ん中の頂上に、太陽が沈むんです。もう温泉も予約してもらいました。去年はちゃんと大湯に、夏至の時に来たんですよ、写真撮りに。で、富樫さんの車にぶつかって、3万円レンタカー損しましたけれども、しかしちゃんと写真撮りました。今度は妙義山の夏至の日没の写真を撮ります。

ところで、こうした事実はまだ強力に反対する人がいるんです。有名な佐原眞、水野正好さんとかですね、錚々たる連中が“あれは偶然だとか、思いつきだ”とか言って反対しているんですけども、しかしなぜ僕の方が正しいかということを証明してですね、最後終わりにします。これはですね簡単なことなんですよ、佐原さんは頭が良すぎたんです。そして早々とですね、縄文時代とはこういうものだというイメージを作り上げたんです。天才だから。本当に天才なんです。この人の右に出る人はもうおそらく僕がそうだったんですけども、佐原さんのレベルに到達できない見通しが濃厚になってきました。それぐらいの人なんです。僕がシャッポを脱ぐんだからわかるでしょ。それぐらいの人なのに、なぜ反対するのかというと、あの人は頭が悪いからではないんですよ、そう言いたいんですね。だけどそうではないんです。かえって、頭が良くて、早々と縄文文化についてのイメージができあがったから、もうこの事実を組み込むことができないんです。そんな馬鹿なというかもしれませんが、もうちょっと簡単な例え話をします。積み木があるでしょ、丸、三角、四角、長方形とかブロックがあるじゃないですか。頭のいい子は、ぱっぱとそれを全部使っていい形を作っちゃうんです。そうすると、僕がこんなおもしろいものがあるよと、星形のを持っていっても、こんなのいらないということになるんですね。僕はモタモタしていたんですよ。そこにこういう新しいものがあるんじゃないかということに気が付いたんです。こういうことは佐原さんだけじゃないんです。山内清男というものすごい大先生がいるんです。この人こそ世界的な人です。ノーベル賞を挙げなくちゃいけないぐらいの人だったんです。この山内先生は、縄文文化の研究を進めて、縄文土器の名前の由来になった縄目模様が、縄を転がすことによって出来るということを見つけた人だし、見つけただけじゃなく、その種類が千差万別で、ものすごい種類があるのを全部解明した人なのです。で、ドイツ語、フランス語、英語全部に通じていて、マルクスの資本論はですね、訳本より原書の方が安いからといって、原書で読むような人なんです。それぐらいの人が、最後まで縄文文化は、紀元前2,500年説なんです。始まりは。ところが事実は、今から12,000年前、紀元前10,000年前なんです。これはもうはっきりしているんです。いろいろな物理化学的測定法で。山内先生は、考古学者なのに、物理学にいちゃもんを付けて、結局そのことについては、誰にも相手にされないで死んでいくわけです。大天才がですよ。なぜかという、さっきも申し上げましたように、あまりにも天才で、縄文文化というものを早くイメージしちゃったから、そしてそれは、紀元前2,500年前に始まらなければいけないんです。だから新しいことが出てきた時にそれに反対しながら死んでいきます。それこそ憤死です。

これを私はウサギとカメの原理と呼ぶんです。もう一度あのお話を思い出さなければいけない。天才には天才の悲劇があるんですよ。ウサギなんかは絶対に負けないのです、カメに。負けないのに負けることがあるんですね。で、これがウサギとカメの原理。どうも御静聴ありがとうございました。

(於：大館市中央公民館 平成8年3月10日)